

インターナショナル電子メールプロジェクト

ポーリー・マーティン（視覚部・一般教育）

要旨：電子化社会において、電子メールが広く利用できるようになるにつれて、「電子メールパル」という言葉がペンパルとおなじように一般的になりつつある。1997年秋に、米国のニューヨーク州にあるNational Technical Institute for the Deafと筑波技術短期大学との学生間での電子メール交換がインターネットを介した日米間のマルチメディア交換プロジェクトの一部として始まった。

キーワード：電子メール、視覚障害

筑波技術短期大学テクノレポート電子メールの機能を教えること。

2) 参加する学生に、相手の国の誰かと実際に電子メールのメッセージの送受信を体験する機会を与えること。

3) コンピュータで受信された電子メール形式での個人的な通信文の書式を理解すること。

4) 自己紹介や質問文の手紙を作成したり、相手の学生（電子メールパル）の質問に対する回答などをとおして通信文を書く練習をすること。

設備

視覚部のLL教室には12台のマッキントッシュコンピュータと2台のプリンタがある。弱視の学生は好きなフォントで拡大印刷ができる。5台のコンピュータにはoutSPOKENという合成音声による画面読みプログラムが搭載されていて、全盲の学生が画面を読んだり入力情報をモニターできるようになっている。Eudora Lightという電子メールプログラムが全てのコンピュータに搭載されている。電子辞書や、印刷した手紙を拡大して読みやすくするための拡大読書機（オブティスコープ）、あるいは個人用の電気スタンドなどが利用できる。数名の学生は自分用の拡大ルーペを持っている。

手続き

1) 導入

2年生の学生は全員マッキントッシュの使い方を知っており、何人かは友達同士や教官との電子メールのやりとりの経験があった。それまで、実際の電子メール交換のアイデアは議論はされていたが、具体的には計画されたことはなかった。1997年6月に著者はNTIDのWilliam Clymer教授と電子メールでコンタクトした。著者の名前は本学の荒木先生によって伝えられた。我々はインターネットを介した日米間のマルチメディア交換プロジェクトのメンバーであるが、著者はまだClymer教授と実際に会ったことはない。興味深いことは、電子メール交換の準備や操作のための本学とNTID間の全てのコミュニケーション、例えばClymer教授と著者との相談といったようなことが、電子メールだけで行われたということである。我々はかつて対面したこともなければ、電話で話したこともないのである。

8月に、Clymer教授から、彼と同僚が「コミュニケーション技術の動向」という授業を持っており、電子メールがその授業での重要な手段であるという通知を受け取った。教授によると、15人ずつのクラスがふたつあり、2学期（秋）には電子メール交換が課題となったとのことであった。NTIDと本学との学期が同じであり、このプロジェクトから効果を期待できそうな2つのクラスを著者が担当していたのでこの交流計画に同意した。

2) 第1回目の交換

27人のNTIDの学生と本学の11名の学生（理学療法学科の2年生と情報処理科の2年生）との間で電子メールの交換を行った。交換は10月中旬に開始し、11月中旬に終了した。

最初の交換は、学生が短い手紙を相手に送り、返事を待つというような簡単なものにした。

本学の学生に自己紹介の文を書き、アメリカの学生に若干の質問をするという宿題を与えた。宿題は授業担当教官がチェックした上で、NTIDの学生への返事として入力させた。チェックと入力の間、学生はふつうの文字や点字、あるいは電子辞書など自由に使ってよいことにし、必要に応じて教官（後で技官が補助としてついた）や友達に質問することも許可した。

3) 第2回目の交換

12月中旬現在、第2回目の交換が始まっている。15人のNTIDの学生が21人の本学の学生（理学療法学科1年生と情報処理科1年生）に電子メールを送ってきている。本学の学生はマッキントッシュの使い方は知っているが、LL教室で電子メールを使ったことはなかった。第1回目の交換の経験を生かした幾つかの変更（以下に示す）を行った。

問題点と対策および課題

1) 人数

NTID側の学生は30名であったのに対して本学の学生は11名であった。このことはちょっとした混乱を最初の日に起こした。何台かのコンピュータは数通のメールを受け取ったが、何台かは1通のメールも受け取らないという事態を生じた。この時には、著者があるコンピュータからの電子メールアドレスをコピーし、手紙をまだ受け取っていない学生に書き移させた。この作業は全盲の学生には面倒なことであった。しかし、次の時間には技官のアシスタントをつけることでこの問題はある程度解決した。

2) 文法とスペリング

何人かのNTIDの学生はフレンドリーに、にぎやかで、気軽に、話し言葉的に手紙を書いた。また独創的な構文を使うので、時として文法的でなくなったり、ミススペルが多くなった。例えば、「Where do u come from, do u like to go that school!!!」という書き方である。このことは、通常文法的に正しいテキストを読んでいる本学の学

生を戸惑わせたが、しかしながら、若いアメリカの学生の生の気軽な会話に接するよい機会を持てた。

3) 授業時間の使い方と段階的な作業

著者の最初の計画では、学生が手紙を受け取り、それを読み、授業時間の中で相手に返事を出すことまでやりたかったが、それはうまくいかなかった。何人かの学生は自分の手紙を送ることに忙しくて、NTIDの学生からきた手紙を読んでいなかった。このことは彼らが実際に人とコミュニケーションしていた状況でないで幾分人間的でないように見えた。ゆっくりと、段階的に進めることが授業時間を効果的に使うために必要だと分かったので、第2回目の交換では次の方法を採用することにした。

a)最初の時間にメールを受け取り、画面上でそれを読み、プリンタに出力する。

b)宿題として、NTIDの学生からの手紙をもう一度読み、自己紹介の文とNTIDの学生に対する質問を書き、NTIDの学生がたずねてきた問いに対する回答を書く。

c)2回目の時間内に、NTIDの学生からのメールを「返事モード」で開き、宿題で科せられた内容を入力する。学生が入力している間、教官がチェックし、問題がある場合は助言する。学生には、頻繁に「保存」するように指示し、教官がチェックするまでは「送信」しないようにさせる。このようにして、手紙は2から3時間目には送信することができるだろう。

4) 送信先に対して

最初の段階では、NTIDの学生から聾者の文化や日本の聾者の状況など、視覚障害学生には答えられない質問がいくつかあった。これからの交流で誤解が起きることを避けるために、終わりの挨拶の部分か手紙の本文に「Division for the Visually Impaired」という言葉を表記することを勧めた。

5) 多様なレベル

学生の英語力や入力レベルが多様であったため、何人かの学生は、他の学生がまだ終わらない内に、手紙を読

み、入力し、送信を終えてしまった。このような場合は、その手紙に書くことをつけ加えさせたり、別の手紙の処理を課した。一方、欠席したり、宿題をやってこなかったりする場合は進度が遅れることが起きた。

6) 個別化と男女のちがい

最初の交換では、NTIDの学生は本学の電子メールアドレスしか教えられていなかった。したがって、メールのタイトルは「Welcome」とか「Greetings」などであり、書き出しは「Hello」とか「Hi」などであった。2回目の交換ではいくらか個別化するために、最初のメールで本学の学生の電子メールアドレスと名前をNTIDの学生に教えた。NTIDの学生はタイトルの欄に「Greetings」に加えて、本学の学生の名前を書くことにした。例えば、「Greetings--H.Ichikawa」というタイトルにして、書き出しは「Dear Hiroki」などとする。また、NTIDの学生に相手となる本学の学生が男か女かを教えておいた。

教育的効果および学生の反応

本学の学生は英語やその他外国語を専攻していないにもかかわらず、外国にいる誰かと電子メールを介して英語でコミュニケーションすることにチャレンジすることを楽しんでいるように見えた。他の宿題に比べて（例えば、作文や口頭発表など）、スペルや文法など細かいところに注意を払っていたようである。恐らく、このような行動の誘因は、その手紙が現実のコミュニケーションであり、つまり、実在のの人に情報が伝わっており、教官のもとで授業のクラスで行っている単なる演習ではないということに気がついたということであろう。しかしながら、数人の学生はこの作業は難しいと主張した。ある女子学生は、コンピュータを使うよりもリスニングやスピーキングに授業時間を使ってくれた方がよいと述べている。

まとめ

学生に電子メールを交換させるという試みは著者にとっては初めてのことであったので、学生と同様に著者にとっても勉強になった。電子メールの送受信のプロセスは、コンピュータの使い方だけではなく、英文を読んだり書いたりする作業を含んでいるので、英語の授業計画

に適用しやすい。第1回目の交換での最大の誤算は、1時間の中にいろいろな活動を詰め込みすぎたというような、授業時間の使い方にあった。

この電子メール交換がスタートし初期の問題が解決したので、このプロジェクトを続けていきたいと考えている。一人の女子学生は彼女の作った詩をNTIDの電子メールパルに送った。将来、教官や学生がコンピュータや電子メールにもっと慣れてくれば、我々は電子メールの使い方の難しさに煩わされることなく、文書作成やコミュニケーションに集中できると思う。また、学生が授業以外の場での文通を続けていくことも期待したいと思う。

International E-mail Project

Martin Pauly

Division for the Visually Impaired--Dept. of General Education

Abstract:

In the electronic age, with e-mail becoming widely accessible, the term "e-mail pal" is becoming as common as penpal. In the fall of 1997 an e-mail exchange between students of the National Technical Institute for the Deaf, Rochester, New York, USA and the Tsukuba College of Technology, Tsukuba, Japan was initiated as part of the Multimedia Exchange in Japan and US via the Internet project.

Key Words:

e-mail, visually impaired students

Aims

- 1) To teach NTID and TCT students the mechanics of e-mail.
- 2) To give participating students the opportunity of actually exchanging e-mail messages with someone from another country.
- 3) To understand personal communicative writing in the form of e-mail letters received by computer.
- 4) To practice communicative writing techniques by composing a letter which contained a self-introduction and some questions and by responding to the questions of another student (the e-mail pal).

Equipment

The Language Laboratory of the Division for the Visually Impaired at TCT is equipped with 12 Macintosh computers and two printers. Students with low vision can enlarge print to a desired font. On five of the computers the voice program outSPOKEN has been installed, allowing totally blind students to read the screen and to monitor what they are inputting. The e-mail program Eudora Light has been installed on all computers. Various dictionaries, a TV-monitor viewer (Optiscope, Ikegami, Ltd.) for increased magnification of printed material, and individual lamps are also available. Many students also have personal magnifiers.

Process

- 1) Getting Started All 2nd-year TCT students had used

the Macintosh computers and some had limited e-mail experience in exchanging short notes among themselves or with a faculty member. The idea of a "real" e-mail exchange had been discussed but there had been no concrete ideas. In June 1997 I was contacted (via e-mail) by Prof. William Clymer of NTID. My name had been passed on by Prof. Tsutomu Araki of TCT. We were all members of the Multimedia Exchange in Japan and US via the Internet project but I had never met Prof. Clymer. It is interesting to note that all communication between TCT (DIV) and NTID for the setting up and operation of the e-mail exchange, i.e., between Prof. Clymer and myself, was carried out entirely by e-mail. We have never met in person, nor have we even communicated by telephone.

In August, Prof. Clymer mentioned that he and a colleague were going to teach a course entitled "Trends in Communication Technology" and that e-mail was an important part of the course. He mentioned that there were two sections of about 15 students each and proposed an e-mail exchange in the 2nd (Fall) term. As the NTID and TCT terms coincided, and I had two classes which I thought would profit from such a project, I agreed to the exchange.

2) 1st Exchange

Twenty-seven NTID students exchanged e-mail with 11 TCT students (2nd-year Physical Therapy and 2nd-year Computer Science). The exchange began in mid-October and ended in mid-November.

It was decided to keep the initial exchange simple, i.e., a student would send a short letter to another student and hope

for a reply.

TCT students were given the homework assignment of writing a self-introduction and a few questions to ask an American student. These were to be checked and corrected by the classroom teacher and then inputted as a reply to the NTID student. During this checking/inputting students were free to refer to print, braille or electronic dictionaries and to ask the teacher (and later the technical assistant) or other students for assistance.

3) 2nd Exchange

As of this writing (mid-December) the second exchange is beginning. Fifteen NTID students are sending e-mail messages to 21 TCT students (1st-year Physical Therapy and 1st-year Computer Science). All TCT students have experience with the Macintosh computer but none have used e-mail in the Language Laboratory. Based on lessons learned from the 1st Exchange (see below) some changes have been adopted.

Problems/Challenges/Lessons Learned

1) Numbers NTID had 30 participants and TCT only 11. This caused a bit of chaos, especially on the first day. Some computers received three e-mail letters and some received none. In that case I had to copy an NTID e-mail address from one computer and dictate it to a student who hadn't received a letter. This was time-consuming, especially in the case of a totally blind student. This problem was partially solved by asking for the aid of a technical assistant for future classes.

2) Grammar/Spelling Some NTID students wrote their letters in a very friendly, colorful, casual, spoken-language style, using creative constructions (e.g., "Where do u come from, do u like to go that school!!") which were sometimes ungrammatical with frequent misspellings. This was initially confusing for the TCT students who are used to reading grammatically correct texts, but it presented a good opportunity to look at the authentic casual speech of young American students.

3) Class Management/Step-By-Step My initial plan of

having students receive a letter, read it in class, and respond to it during the same class did not work well. Some students were not reading the letters from NTID students as they were in a rush to send out their letters. This seemed to be a bit impersonal as they were not actually communicating with another person. A slower, more step-by-step method, has evolved to make more efficient use of class time and this will be used in the 2nd Exchange.

a) In the 1st class, receive the letter, read it on the screen, and then print it.

b) For homework, reread the letter from the NTID student, write a self-introduction and some questions for the NTID student, answer any questions which the NTID student asked.

c) During the 2nd class, open the NTID student's letter in "Reply" mode, and begin inputting the homework. While the students are inputting, the teacher checks each student and helps with problems. Students are instructed to "Save" frequently but not "Send" until the letter has been checked by the teacher. The letter can be sent during the 2nd or 3rd class.

4) To Whom In the first stage there were some enquiries from NTID students about deaf culture and the situation of deaf people in Japan, to which the visually impaired students did not know how to respond. To avoid future misunderstandings, students were advised to include "Division for the Visually Impaired" in their salutation or in the body of the letter.

5) Various levels As the literacy skills and typing skills of the students varied, some of the students finished their reading and inputting and were prepared to send before others. When this happened, they were instructed to add to their letter or were given another letter to which to respond. On the other hand, absences and failure to prepare slowed other students.

6) Personalization/Gender In the 1st Exchange, NTID students were given only a TCT e-mail address. The Subject line was usually "Welcome" or "Greetings" and began with "Hello" or "Hi." To personalize the 2nd Exchange

a bit more, from the first post NTID students were given the e-mail address and name of the TCT student who sits at that computer. NTID students were instructed to write "Greetings" and the TCT student's name in the Subject line, e.g., "Greetings--H. Ichikawa" and then start the letter with "Dear Hiroki." NTID students were also told if the TCT student was male or female.

and assistance to Prof. Tetsuo Kurokawa and Ms Fujiko Ohsawa of the Division for the Visually Impaired and Prof. Tsutomu Araki of the Division of the Hearing Impaired, both of the Tsukuba College of Technology and to Professors William Clymer and Douglas MacKenzie of the Center for Research, Teaching and Learning, National Technical Institute of Deaf.

Educational Benefits/Student Reaction

None of the TCT students are foreign language or English majors but they seemed to have enjoyed the challenge of communicating with someone in a foreign country through English and by means of e-mail. Compared with other assignments (e.g., compositions or speeches) I noticed more attention to details, e.g., spelling, grammar. Perhaps the incentive for this was that they knew the letter was for real communication and was going to a real person, and was not merely a classroom exercise for a teacher. A few however, mentioned that it was "difficult" and one woman said that she preferred to use the class for more listening and speaking rather than with a computer.

Summary

As this was my first attempt at having students do an e-mail exchange, it was a learning experience for me as well as the students. As the process of sending and receiving e-mail letters involves reading and writing skills, as well as computer skills, it can easily fit into the syllabus of an English language class. The biggest error in the 1st Exchange was in the mismanagement of class time, by trying to fit too many activities into one class.

As the e-mail exchange has been started and initial difficulties ironed out I hope to continue with the project. One TCT woman sent a poem she had written herself to her NTID e-mail pal. In the future, as staff and students become more comfortable with the computers and e-mail, I would hope that we can concentrate more on the writing and communicating and less on the mechanics of e-mail. I would also hope that the students continue their correspondence outside of class.

Acknowledgements

The author wishes to express his appreciation for advice